はぴねす！C.S.

IC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はぴねす！Ｃ．Ｓ．

【Ｎコード】

Ｎ７８０９Ｒ

【作者名】

ＩＣ

【あらすじ】

この小説は以前他のサイトで投稿したモノをこちらに移した物です。

はぴねす！とリボーンのクロスになりますが、リボーンに関しては設定のみで、キャラは出てきません。時代は？世でボスならびに守護者がすべてオリキャラとなります。

Prologue（前書き）

元・狼牙として別サイトで投稿していた小説です

prologue

プロローグ

幼い頃の夢、魔法で人を幸せにできると思っていた。

自分の魔法であの女の子のような笑顔を見れると思っていた。

家族が離れ離れになったとしても。

本気で、そう思っていた。

だけど・・・・・・・・・

今、目の前は多くの人が倒れている。

そこに、たまたま通りかかったわけではいない。

なぜ、倒れているのかも知っている。

なぜなら・・・・

これは、自分がしたことなのだから。

俺が手にしたのは・・・・・・・・・・・・・・・

幼い頃の夢から、かけ離れた・・・・

そんな、力だった。

だけれど・・・・・

俺は後悔はしていない。

自分で決めた道だから・・・・・・・・

たとえ・・・・・・

他人に誇ることができなくとも・・・・・・

この力で・・・・・

たった一つ・・・・・・

出来る事があるのだから・・・・・

第一話「二月十三日」（前書き）

一話一話が短いです

第一話「二月十三日」

ｐｉｐｉｐｉｐｉ・・・・

休日の朝っぱらから、携帯が鳴り響く、画面を見ると準からだ

ピッ

佑太「はい」

準『あ、佑太！今日暇よね、暇でしょ！』

こうやって、急かすって事は

佑太「・・・・・どこに行けばいいんだ？」

準は以外だったらしく、あら？声を出した。

準『雄真みたいに断るかと思ってたのに・・・・・』

佑太「どうせ断ったら家まで来るんだろ。それに、俺も少し用があるからな」

過去、何度か誘いを適当に断ったりしていたら準は雄真とハチを連れ家に押しかけてくるようになったのだ。

さすがに、本当に用事があるときは大人しく帰るけど

準『よくわかってるじゃない♪じゃあいつものオブジェ前で待って

るから♪』

佑太「ああ」

電話を切ると、上着を掴み家を出た。

準「あっ、佑太〜♪こっちよ、こっち！」

佑太「・・・・・頼むから、大声で叫ばないでくれ」

オブジェの前に着くとそこには既に準がいて俺に向かって手を振ってきた。

・・・・女の格好をして

準「どう？似合う？これ、お気に入りなんだ〜♪」

佑太「・・・・・違和感がないのが、困る」

ポーズを決めながら聞いてくる準。確かに似合う事は似合うのだ。

ただ、それが女の子ならだ。いくら、似合っていようとも今俺の目の前にいるのは男なのだ！
思わずため息が出てしまう。

入学当初は俺も準の事を女性と思っていたが雄真とハチにこいつが男だと聞いた時はかなり驚いたのを覚えている。

佑太「雄真は・・・まだ来てないのか。ハチもまだみたいだし」

準「ハチは来ないわよ。つかまらないんだもん」

腰に手をやり頬を膨らます。本当にこいつは性別間違えてるなとりあえず、雄真の到着を待っていると雄真が走ってくるのが見えた。

準「あっ！雄真おっそ～い！チ・コ・クよ♪」

雄真「っ！！」

雄真は俺がいるのに驚くも、準の態度に反応し顔を引きつらせた

準「なぁに、その顔は」

雄真「いや、気にするな」

雄真は視線を逸らしながら言う

佑太「ところで、どこに行くんだ？」

集まった理由が分からず二人に聞くが

雄真「準、話してないのか？」

準「だって、言ったら佑太は絶対来ないでしょ」

雄真「確かに」

聞こえてるぞ

佑太「で、何処へ行くんだ」

雄真「今日は、何月何日か知ってるか？」

雄真が呆れ顔で訪ねて来る。

馬鹿にしているのかこいつは。

佑太「馬鹿にするな今日は二月十三・・・・・」

雄真「そういうことだ」

思わず表情が固まってしまった。そうか、明日は

佑太「・・・・帰る」

身体を翻し帰ろうとすると

準「それじゃ～佑太には、あっま～いチョコの詰め合わせで決まりね♪」

準の言葉に足を止める

準「もちろん、全部食べさせてあ・げ・る♪」

佑太「くっ！」

そうなのだ、俺は甘いものが苦手だ。その上、準に食べさせられるだと！

俺にそんな趣味はない！

佑太「わかった、付き合おう・・・・・だから」

準「わかってるわよ、チョコは免除してあげる。その代わり、今日は一日付き合って貰うからね♪」

佑太「わかってるよ」

雄真「相変わらず、甘いのがダメなんだな」

雄真はかすかに笑みを浮かべていた

準「それじゃ～レッツ！ゴ～～♪」

そんなこんなで、目的地に向かった・・・・

準「大漁大漁～♪」

佑太・雄真「「・・・・・・・・はぁ～」」

帰り道、準はホクホク顔で俺と雄真は疲れきった顔で歩いている。

あれから、チョコレート売り場という名の戦場に行ったのだが、俺と雄真はあらためて女の子の驚くべき力を垣間見た。

それにより、俺たちは体力、精神ともに疲れ果てていた。

準「何よ、二人とも元気がないわね～」

雄真「さすがに、あの空間にいるのはなぁ」

佑太「確かに、辛い・・・」

バレンタインデー一色に包まれた場所に先ほどまでいたのだ。それに・・・・

佑太「去年も言ったと思うが、俺のような無愛想な男なんかが一緒にいたら落ち着いて選べないだろうに・・・先ほども、よくチラチラとこっちを見られていたしな」

雄真「・・・・まさか、さっきの人たちはお前のことを怖がってた

と思っているのか？」

佑太「まさかも何もその通りだろ。バカかお前は」

準・雄真「「はぁ～～～～」」

二人は、俺の言葉を聞きため息を吐いた。

雄真（こいつは・・・・相変わらずモテるという自覚がないんだな）

準（佑太ってばかっこいいのに。この鈍さは犯罪ものよね～）

なぜか、二人は呆れたような顔をしている。

佑太「それにしても準よその量は、ファンクラブの奴らにも配るのか？」

準「そうよ♪クラスの皆にもね♪佑太の分もちゃ～んとあるからね♪」

佑太「・・・・・・約束と違うぞ」

チョコを受け取らない代わりに今日は付き合ったんだぞ

準「大丈夫よ、ちゃんとビターチョコだから♪」

佑太「そうか・・・・義理ならありがたく受け取ろう・・・・と失礼、本命は決まっていたな」

視線を雄真へと送る。

雄真「・・・・佑太、何で俺に視線を送るんだ？」

佑太「・・・・・・・・・・たいした意味はない」

さっと、視線をそらす。

準「心配しなくても雄真には後でちゃんと本命をあげるわよ♪」

準が雄真の腕に抱きつく。

雄真「いらんわ！！」

こいつらは、相変わらずだな。

佑太「もう用はすんだのか？」

準「そうね、あたしの方は大体終わり。雄真も佑太もチョコレート買った？男の子からチョコを渡すってのもあたしはアリだと思うな」

準「二人は気になる女の子とかいないの？」

雄真「気になる子ねぇ……」

佑太「特には」

女の子と聞いてもいまいちピンと来ないし

準「そういえば、二人に浮いた話は聞かないわね」

雄真「んー、何となくそんな気になれないっつーか」

佑太「興味が無い」

準「冴えないなぁ、もっと青春しなくちゃだめよ！」

よけいなお世話じゃ！

第二話「公園の魔法使い」

不意に何かが聞こえてきた。

雄真「ん・・・？」

雄真もそれに気づいたらしく耳を傾ける。準は気づいてないらしく、俺たちを見て首を傾げている。

何かを確かめるために足を止め発信源を探すと発信源は近くの公園からだった。

女の子「返してよぅ！！」

男の子「誰にやるか、言ったら返してやるよ！」

そこには、数人の男の子に何かを返してもらおうと必死になっている女の子を見つけた。

涙を浮かべながら必死になっている。そんな女の子には目もくれず、遊び半分でいじめている男の子に俺は不快な思いが湧いてきた。

男の子「ほ～ら、ケンジ、パスだ～っ！」

ケンジ「オーライ！よっ、と」

男の子達は何かをパスしては回し、女の子をからかっていた。

たしかに、あのくらいの年頃は異性を構いたくはなるものだと思うが・・・

準「ちょっと、あれはやりすぎじゃない？」

佑太「ちょっと行って来る」

ため息を吐き公園へと足を踏み出そうとした矢先、

準「あれ・・・・あの娘・・・」

準が何かに気付き視線を向ける。俺も同時に気付き視線を向ける。

女性「そこまでにしたら？」

そこには、俺達と同じ年くらいの女性が子供たちの前に立っていた。

その女の子の容姿も目を引くがそれよりも目を引いたものは背中についている長い棒のようなの。

あれは、マジックワンドだ。

女性「女の子に意地悪なんて、最低の男の子のすることよ」

その娘は男の子たちを諭すような優しい笑みを出した。

だが、第三者の仲介により男の子達の機嫌は悪くなり悪口を言い始める

佑太「ったく」

雄真「お、おい佑太？」

佑太「おい、そこのコゾウ共」

俺の声が響き子供たちと女の子の視線が俺へとうつる。

佑太「女の子をいじめてはいけないと幼稚園で教わらなかったのか」

ケンジ「お、大人が口を挟むんじゃねぇよ・・・」

さらに人が増えたことで、男の子達は気まずくなったのか

ケンジ「ほらっ」

と、舌打ちをしつつも、包みを女の子の目の前に放り投げ、終わったかに思えたが・・・

ケンジ「へんっ！」

なんと、包みを踏み逃げ出した

女の子「あっ！」

女性「！？」

佑太「・・・・・・いい度胸だ」

怒りの矛先がガキ共に向けると

男の子達「わーーーーーっ」

一目散に逃げていく。追いかけようとするが、女の子が気になって

しまう。

振り返って、女の子を見ると、女の子は俯いており、無残にも潰れてしまった包みに涙が落ちてた

女の子「ふえっ・・」

女の子が泣き出そうとするとき、

女性「ねぇ」

その子の頭に優しく手を置き

女性「そのチョコ少しだけ貸してみて」

その女性は潰れた包みを受け取ると静かに目を閉じた。

女性「エル・・・アムダルト　リ・・・エルス」

包みが、光に包まれる。

魔法により、潰れた包みが元の綺麗な物へと戻っていく。

女性「はい、どうぞ」

笑顔で、女の子にチョコを返す。

女性「好きな人にあげる物だったのよね」

女の子「う・・・・うん」

女の子の涙が止まり笑顔へと変わる

女性「そう・・・・その想い、大切にしてね」

女の子「うん！ありがとう！お姉ちゃん、お兄ちゃん！」

手を振り笑顔で帰っていった

俺はその光景を少し離れた見ていた。

笑顔を与え人を救える魔法。

俺にはその光景がまぶしすぎて・・・

まっすぐ見ることができなかった。

女性「あ、あの、さっきはありがとうございました」

佑太「俺は、何もしてない」

突然、お礼を言われたもので、思わず答えてしまう。

準「こら、佑太！な～に神坂さんと仲良くやってんの？」

雄真「俺達を置いていくなっての」

佑太「ああ、すまんな」

神坂「え？」

急に横から入ってきた準と雄真に困惑気味の神坂さん

準「あなた、神坂春姫さんでしょ？」

春姫「はい、そうですけど・・・・・。おの、えっと・・・・初めまして・・・ですよね？」

突然の事でまだ少し困惑しているようだ。

準「そ、初めまして。私は渡良瀬準よ、よろしくねっ♪で、こっちが小日向雄真♪」

雄真「よ・・よろしく」

雄真は少し緊張気味だ

春姫「・・・クスッ。はい、よろしくお願いします、準さん、小日向君それと・・・」

神坂さんの視線が俺に向く

佑太「・・・・平沢佑太だ。準、雄真、用事が済んだようだから、俺は帰る」

名前だけ名のり早足でその場を後にした。

準「ごめんね、神坂さん。佑太ってば照れちゃって」

雄真「でも、あんたの魔法も凄かったよな」

準「そうそう♪あたし、なんだか感動しちゃった♪」

春姫「あの、その事なんですけど・・本当は無闇に魔法は使っちゃいけないんです。だから今日の事は・・・」

魔法は便利な反面、危険も伴うだからこそ無闇に使う事はできないのだ

雄真「わかった」

準「佑太にもちゃんと言っとくから心配しないで♪」

そう、約束を交わし二人は春姫と別れ帰路に着く。

春姫も同じように寮へと向かっていった。

その頃、先に公園を後にした俺は

佑太（・・・・・・悪い事したな）

少し、うなだれて歩いていた。

佑太（言えるはずが無いだろう。・・・・・・神坂さんの魔法に嫉妬したなんて）

幼い頃、目指していた魔法。

その一片を今さっき目の前で見たのだ

笑顔を与えられる魔法。

幼い頃の夢。

佑太「もし、今度会える事があったら・・・・・」

俺はどうすればいいんだろう

第三話「バレンタインデー」

佑太「・・・・・」

朝起き、日課の鍛錬を済ました後シャワーを浴び朝食の準備を済ます。

なぜだろう、今日は目が覚めてからずっと変な悪寒がする。

佑太「気のせいである事を願うか・・・」

朝食を終え簡単に準備した後家を出る。

俺は気付いていなかったのだ。この悪寒の原因が二月十四日もといバレンタインデー

つまり今日だということに

雄真「・・・・おはよう・・・・・・はぁ」

佑太「おはよう・・・・どうしたんだ？ため息なんて吐いて」

下駄箱で、ため息を吐きながら来た雄真と会った。

なんだかこいつ、甘ったるい匂いがするんだが・・・

雄真「実は、毎年の事なんだが、すももが・・・・」

佑太「すももがどうかしたのか？」

雄真の妹の小日向すももとは何度か面識がある。俺たちより一学年下で明るく親しみやすい子だ

雄真「あいつは、毎年朝まで張り切ってチョコを作ってるから朝起きると家全体にチョコの匂いが充満してるんだ」

うわ～、想像したくねぇ～

佑太「それは・・・・・ご愁傷様」

雄真「毎年の事ながらすっかり忘れてたよ」

佑太「はははは・・・・」

もう、笑うしかないなこりゃ

雄真「そうだ、佑太。すももが家に来てほしいって言ってたから帰りに寄ってけ」

佑太「ん、わかった」

話しているうちに、自分の教室へとついた。

ハチ「グッドモーニング！！！」

雄真「朝から騒がしいぞハチ」

佑太「なんで、お前は朝っぱらからテンション高いんだよ」

扉を開けた先で俺達を待っていたハチはいつも以上にテンションが高い

ハチ「なんでもなにもお二人さん！今日はバレンタインデーだぞ！！男の価値が試される日ぞ！！わかってんのか！？」

ハチのテンションが更に上がりバレンタインデーを必要以上に豪語している。

雄真「あ～、俺、もういいや・・・・」

佑太「興味がない」

ハチ「かぁ～～っ！何だそのやる気のない返事は！！」

やる気は人それぞれだろうに

ハチ「『朝を制するものはバレンタインを制す』って格言を知らんのか！？」

佑太「知らんというか・・・・知りたくない」

雄真「で、戦績は？」

雄真の言葉にハチはニヤつきながら雄真の前に手を出す

ハチ「で、お兄様？すももちゃんから俺に預かってるものはないのかね？」

あ～、それで、雄真を待ってたわけか

ハチ「もったいぶらずに出したまえよ、ほらチョコとか。あるいは、チョコとか。」

雄真「ねーよ、そんなモン」

ハチ「フッ！そーだよな・・・やっぱり基本は手渡しだよな・・・・デへ」

だめだこいつは、顔がニヤけきってる。何処からくるんだよその自身は

佑太「準からは貰わなかったのか？」

ハチ「バカを言うな！！準は確かにそこらの女の子よりも可愛い。それは認めよう。しか～し！所詮は男。そんなやつからチョコを貰って、何が嬉しいというのだぁ！！」

ハチの高らかな宣言に対し、俺達ではない別の人物からツッコミが入った

準「へぇ～、ハチってばそーだったんだぁ。ふ～ん・・・」

その人物とは、いつの間にか俺達の元に近づいてきていた準だった。

ハチ「ゲッ、準！もしかして・・・・今の、聞いちゃったりしてたのか？」

準「さあ、どうかしらねぇ～。はい佑太、これチョコね、ちゃんと甘くないのだから」

佑太「ああ、悪いな」

準から手渡されたチョコを受け取る

準「で、これは雄真の！これだけは、他のと違ってト・ク・ベ・ツ♪だからね」

それは、見事なまでに包装されたチョコレート。

雄真「いろいろとツッコミたいが・・・・とりあえず、ありがとう」

続いてハチのほうに向くが

準「ハチは男からなんてチョコを貰っても嬉しくないんでしょ？」

そう言って準は立ち去ってしまった。

ハチも最初は強がっていたが、やはり貰えなかったのが悔しかったのだろう教室の隅の誰にも見られないような所でガッカリとしていた。

準はコッソリとその様子を教室の外から見ていた。

佑太「ふぁ～」

俺は今、屋上で横になっている。周りには人の気配はない。
それもそのはず今は授業中なのだから。世界史の授業だが、担任が司だから大丈夫だろう。

そんな感じで、ウトウトしていると人の気配がした、その人は俺の方へと近づくと俺を覗き込んでくる。逆光で顔は見えないがこの気配は・・・・

佑太「授業サボっちゃ不味くないですか、高峰先輩」

小雪「偶然ですね佑太さん。まさかこんな所で会えるなんて」

いや、ここ普通科の屋上だし！先輩は魔法科何ですから偶然ってのは少し無理があるんじゃねぇ？

そんな考えをよそに、当然の用に隣に先輩は俺の座る

この人、高峰小雪さんと会ったのは入学後少したった時の事。
雄真達とも仲良くなり皆で、帰りに遊びに行く事になった。
その日ハチと準は掃除当番だったので雄真と二人校門で待っていたときの事、突然、声をかけられ雄
真に

小雪「あなた達、とても不幸な相をお持ちですね」

そして俺には

小雪「随分大変な道を歩んでいるのですね。孤高の道を歩むあなたにたくさんの相が絡んでます。・・・・女難の相は特に多いです」

などと言われた。その後、何度か顔を合わせるうちに仲良くなった。
彼女が魔法科の生徒で占いがとてつもなく当たるということも後々
聞いた

小雪「良い天気ですね」

佑太「そうですね」

のんびりと空を見ている

？？「なんや佑太の兄さん。もっと小雪姉さんをエスコートしたらどうや？」

佑太「タマ・・・・お前は俺に何を望んでんだ」

脇から先輩のマジックワンド『スフィアタム』・・通称タマちゃんが転がってきた。

小雪「タマちゃん、無理を言ってはダメですよ」

タマ「せやかて小雪姉さん。佑太の兄さんが目的で授業サボってまでここに来たんやろ？」

小雪「それは、そうですが……」

サボったのって、俺のせいですか

小雪「自習なんで……」

佑太「そうですか」

小雪「佑太さん、あの……これ…受け取って貰えませんか…？」

佑太「…」

突然の事で一瞬止まってしまったが、彼女が俺に渡そうとしている物は綺麗に包装されリボンが付いている箱

佑太「これって…」

タマ「これもなにも、チョコに決まってるやないかい。兄さんは幸せ者やで～。小雪姉さんからチョコを貰えるなんて」

小雪「タマちゃん／／／」

佑太「おりがとうございます先輩。ありがたくいただきます」

笑顔でお礼を言うと

小雪「はい／／」

笑顔で返してくれた。

たとえ、義理でも貰えるのは嬉しいものだ……甘いものだけど

後でゆっくり戴こうと思い制服のポケットにしまおうとすると

小雪「おの、佑太さん…今、食べてくれませんか？」

それを拒む理由はないのだが

佑太「……なぜ、と聞いてもよろしいですか？」

小雪「佑太さん今日の午後からの運勢は最悪と出ました」

佑太「つまり、これは厄除けのアイテムって事ですか？」

小雪「はい、だから食べてください」

義理でもないし。別に占いとかって正直信じてないけど

タマちゃんがじょじょに膨らんできてるし

佑太「いただきます」

包みを空け中身を確かめると丸型のチョコがいくつも箱に入っていた。

その一つを取り口に入れると、チョコの甘さが口の中に広がる。

小雪「……どうですか？」

佑太「おいしいです。とっても」

お世辞ではなく本音だ。甘いものが苦手だが、抑えられているようで美味しい。

タマ「そのチョコ、姉さんの手作りなんでっせ。ちゃんと味わって食べや～」

佑太「本当ですか？先輩」

小雪「……はい。ちゃんと、全部食べてくださいね。佑太さん」

佑太「はい。ありがとうございます」

義理？とはいえ貰えただけでも感謝しなくちゃな。

小雪「い、いえ……では、私はこれで失礼します。タマちゃん」

タマ「はいな。ほな兄さんまた会いましょや～」

佑太「ああ、またな」

杖に乗り魔法科の校舎に戻っていく。その後姿を見ながら更にもう一つチョコを口に入れた。

第四話「昼の天王山」　（前書き）

今回は短めです

第四話「昼の天王山」

ハチ「な、何ぃ！！小雪先輩からチョコをもらっただってえぇ！！」

昼休みに入り教室に戻ってき、雄真は俺が手に持っていた包みを見て誰から貰ったのか聞かれたから先輩からと答えたら、それを聞いていたハチの第一声がこれだった。

佑太「うるさいよハチ」

ハチ「俺達が真面目に学問に謹んでる間に貴様という奴は！」

雄真「ハチ、お前は寝てただろ」

ハチ「フッ…それはもちろん昼に備えてだ」

強がってはいるがわずかに口元が引きつっている。

佑太「ハチは置いといて、昼どうする？」

ハチ「置いとくなよ！！」

準「あたし、お弁当♪」

雄真「俺はｏａｓｉｓ…少しかーさんと話があるし」

佑太「話？ああ、今朝の事か」

雄真の言う『かーさん』とはｏａｓｉｓでチーフをしている小日向

音羽さんのことで雄真とすももの母親だ。

準「佑太は？あたしと一緒にお弁当？それとも雄真とｏａｓｉｓにでも行く？」

佑太「俺は購買で買って教室で食うよ。じゃ、行ってくる」

と購買に向かったのだが……

準「で、売店に行って戻ってくるまでの戦利品がこれってこと？」

佑太「いや、義理とはいえ無下に断れないだろ……」

準「義理ねぇ～。あたしこんなに気合の入った義理チョコ初めて見るわよ」

佑太「？だいたいがこんな感じじゃないのか？」

準「はぁ～、相変わらずなのね」

佑太「あ？」

売店にパンを買いに行ったのだがその途中多くの女生徒から呼び止められ

女生徒「あ、あの、平沢君……これ、受け取ってください」

佑太「……俺？」

女生徒「は、はい／／／／」

目の前の女の子は同学年らしい。顔を真っ赤に染めている。

佑太「……くれるっつうんなら、貰うよ」

できるだけ怖がらせないように笑顔で受け取る

女生徒「っ！は、はひ！お、お返しは大丈夫ですから！そ、それじゃ！」

と言い残し全速力で走って行ってしまった。

やっぱり、怖かったか・・・・・・

このような事が何度も繰り返され結局

準「こんなにもらったってわけね」

佑太「……ああ」

こんなに、どうしろと言うんだ

佑太「ハチは？」

準「一緒じゃないの？売店に行ったはずだけど？」

佑太「そうなのか。あ、あそこにいた」

パンを口にしながら指をさす。準が指の先を見るとそこには口をあけて石化しているハチがいた

準「やれやれ、ねぇ」

パンを食べ終える頃に雄真も教室に戻ってくる

雄真「なあ、あれ、どうしたんだ？」

あれとはハチのことだろう

佑太「さあ、知らん」

雄真「知らんって……って佑太、そこに積んである物って」

佑太「ああ、チョコだな。さっき貰った」

チョコを見たとたん雄真がガックリとした

雄真「やっぱり、モテるんだな」

準「もしかして、雄真ったら羨ましいの～？」

雄真の背中に準が抱きつき、耳元で囁く。

雄真「離せ準！男に抱きつかれても嬉しくない！」

と、そこで準が雄真の手のチョコに気づく

準「あら、そのチョコ誰にもらったの？」

雄真「人の話を聞け！これはかーさんからもらったんだよ！」

雄真は準を振り払い

雄真「佑太。かーさんが今日は家で夕飯食べていけって」

佑太「ん、わかった」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7809r/

はぴねす！C.S.

2011年3月31日12時04分発行